

近代化産業遺産を生かしたまち学習

— 高校生によるインターネットまちづくり発信 —

河野 義 知 (愛媛県立新居浜南高等学校)

曲 田 清 維 (住居学研究室)

(平成18年6月2日受理)

The learning of town planning through the modern industrial heritage

— The town information of the internet by high school students —

Yoshitomo KOUNO, Kiyotada MAGATA

はじめに

愛媛県新居浜市は、人口13万人の四国山地と瀬戸内海に挟まれた四国屈指の工業都市。その都市基盤づくりに大きな役割を果たしたのが別子銅山である。

別子銅山は日本の三大銅山の一つとして数えられ、1691年(元禄4年)に開坑し、開坑後7年目にして世界一の産銅量に達した。そして、住友一社で掘り続けられるという世界にもまれな形態を持ちつつ、掘られた坑道の総延長は約700Kmにも達し、総出鉱石量3000万トン、産銅量65万トンという膨大な銅を産出した。銅山そのものの歴史は、1973年(昭和48年)に閉山するまでの約300年間にわたり、この間、日本の産業の近代化にも大きく貢献するとともに、銅関連産業に関わる様々な構築物が、山側の別子山村と海側の新居浜市に営々と築き上げられてきた。

こうした構築物は貴重な近代化産業遺産として位置づけられ、大小含めてその数は200を越える。なかでも象徴的な存在が、別子山中に保存されている銅山最初の坑口となる「歓喜坑」である。昨今約30年ぶりに往時のままにリニューアルされた。その奥にはダイナマイトで開削した第一通洞が保存され、さらには鉱石を運ぶ鉱山鉄道跡が尾根沿いを舞っている。

山中には、鉱山労働者の生活施設があちこちに点在し、小学校跡や劇場跡、接待館跡など、この狭い峡谷のどこに1万数千人の人々が暮らし、働いていたのかと思うと、鬱蒼と茂る木立の中で実に不思議な気分になる。

一挙に山を下りると、山上の上部鉄道から平地部の下部鉄道に繋がり、途中に日本一の落差を誇った旧端出場水力発電所を見ることができる。今でも変電所機能は果

たしているという現役の建物。ドイツ製の発電機も含め、貴重な遺産の代表格である(写真1)。

さらに市街地には、銅山関連の博物館や資料館などが整備され、学習機会にも事欠かない。もちろん、銅山鉄道駅舎のくたびれた姿はそのままだし、戦前の住友関連の洋風や和風の幹部社宅も健在で、町全体が近代化産業遺産の宝庫となっている。

そして圧巻は日本の公害克服の原点といわれる四阪島。現在は住友金属の管理下に置かれているが、洋上から見る島影は、銅滓が断崖にこびり付き、見る者を威圧する。許されて皆で巡った島は、まさに銅精錬の歴史そのままに、工場群や日暮別邸(迎賓館)、住居群などが巨大な映画のロケ現場のように立ちはだかっている。

本研究は、新居浜・別子に広がる膨大な近代化産業遺産を基軸にまちづくりを進めている行政や地域との連携の中で、高校生ならではの「まち学習」と「まちづくり発信」を続けている取り組みを紹介するものである。ここでは、単なる活動の記録を乗り越えて、協働・連携によるユニークな学習とともに、生徒自身の成長を楽しく辿ることができる。



写真1 旧端出場水力発電所

1. 研究の目的と方法

新居浜南高校情報科学部の近代化産業遺産に関する情報発信は、数多くの遺産群の紹介にとどまらず、新居浜・別子のまちづくりの材料として有効であるとともに、地域の人々、行政、高校生を含む多くの子どもたちへの協働・連携のメッセージを含んだものとなっている。もちろん、ネット上を飛び交って、日本中、世界中へ繋がっているのはいうまでもない。こうした情報発信の裏には、彼ら自身が、見て、聞いて、触って、学習し獲得した貴重な「情報」の数々が隠されている。

本研究では、新居浜南高校情報科学部の活動の軌跡を辿りながら、高校生のインターネットによる情報発信がまち学習として根付き、また人々を結びつけるユニークなまちづくり活動としてどのように位置づけられるかを検証するとともに、活動に伴う生徒らの成長を確認しようとするものである。活動の記録は、1996年発足以来の情報科学部の生徒および顧問（河野義知教諭）の手により蓄積されたものを活用・分析するとともに、2000年からは愛媛大学住居学研究室（曲田清維ほか）との一部協働研究によって培われたものも加えながら、検討を進めていく。

活動の軌跡は、1999年の情報科学部の活動の開始から今日までを一年ごとに区切り、活動内容とおおよその獲得目標を照らし合わせながら、以下のように時期区分した。第1期（1999年度）－「活動草創」期、第2期（2000年度）－「地域交流の萌芽」期、第3期（2001年度）－「地域取材の確立」期、第4期（2002年度）－「協働学習の試行」期、第5期（2003年度）－「近代化産業遺産の理解の浸透」期、第6期（2004年度）－「学習情報発信の多様化」期、そして第7期（2005年度）－「まち学習の成熟」期、の7区分である。この7つの時期区分に基づきながら、活動内容と生徒の成長一獲得したものを検証していく。

2. 活動の草創

情報科学部の創設は、1996年に新居浜南高校が普通科から総合学科へ移行した時に遡ることができ、その活動の手始めとして、インターネットを活用した学校紹介のホームページ作成が始まった。活動の転機は、1999年の学校紹介ホームページを充実させるための地域紹介のコ

ーナーづくりであり、この年の作業がその後の地域密着型の学習活動をベースにした情報発信への貴重な足がかりとなる（表1）。

地域紹介は、生徒や顧問教諭との知恵比べを経て、程なく工都新居浜市としての基盤づくりに重要な役割を果たした別子銅山をテーマとすることとなった。それは、南校周辺の別子鉱山鉄道の軌道跡や製錬所跡のレンガ煙突、別子銅山記念館、広瀬歴史記念館など別子銅山にゆかりの深い産業遺産や施設があることも大きなきっかけとなった。

まずは、地域情報の収集である。情報科学部員総出で、カメラやビデオ機器を担いで、別子銅山の発祥地となる旧別子地域（別子山地区）の山中を調査し、この地域に点在する近代化産業遺産を取材し、情報を収集した。別子地域の探索は初めての部員も結構多く、山道の厳しさや、森の間に眠る遺産群に驚きの声をあげることもばかりであった。目と足で稼いだ情報を元に、次には別子銅山記念館を訪ね、さらに詳細な情報・資料の収集や検証を行いながら、コンピュータを活用して整理し、ホームページとしてまとめていった。

タイトルは「あかがねの里 別子銅山」とし、写真や文章に加え、ビデオ映像や360度を見渡せるパノラマ映像を駆使するなど、ページを見る人がいながらにして現地を疑似体験できるよう、当時のインターネットの技術を最大限に活用したものであった（写真2）。

完成したホームページは、全国規模のホームページコンクールである「第6回 ぼくの街 わたしの村 マイタウンマップコンクール」（財団法人情報処理教育助成



写真2 旧別子地区を紹介した作品

財団主催)に出品することになり、グランプリ賞の一つである「日本放送協会会長賞」を受賞した。情報科学部にとっては、まさに順風満帆の船出となるとともに、確かな自信となった。

3. 地域交流の萌芽

(1) 交流の広がり

受賞がテレビや新聞で報道されることで、情報科学部の活動が地域に知られるきっかけとなり、地域との交流活動は大きな広がりを見せていくことになる(表2)。

前年度の受賞は大きな励みとなり、2000年度はさらなるチャレンジとして、東平地域の近代化産業遺産群を中心に、往時の産業・生活文化・教育などについてまとめようということになった。今回は、企画時点より地域の方々から、様々な助言や時には現地案内までかかっていただいた。その労を惜しまない連携・協力は生徒たちの大きな支えとなった。

生徒たちの学習意欲は旺盛で、別子銅山の観光施設等でのボランティアガイド養成のための学習講座で、生徒たちは大人の受講者と机を並べ学習に参加した。次には、学習講座で席をともにした地域の方を先生にして学習会を行ったり、生徒たちが鉱山体験者や研究者のお宅を直接、訪問取材するという積極的な取組も着実に増えていった。地域の方とのふれあいによって、異世代の人たちと自然な交流が生まれ、別子銅山の歴史の学習とともにその人の生き方を学ぶ機会ともなり、生徒たちは一段と成長することとなる。そして、身近なところに貴重な体験を持つ人々がいることを認識し、こうした人々の努力によって現在の自分たちの「まち」があることを強く感じる事ができた。今まであまり関心のなかった「まち」や「ひと」のイメージが

大きく変わるきっかけになったというわけである。加えて、閉山30年を経て体験者が高齢化し、このままではまちの歴史や文化が風化してしまうのではないかという危機感を持つまでとなった(写真3)。

このようにして、調査・研究・収集した資料を整理しながら、部員それぞれの得意分野に分かれて作品制作に入った。

(2) 進化するホームページ

インターネットの技術革新に合わせて、マルチメディア分野における最新の技術を導入することにより、次なるホームページは、閲覧者がさらに臨場感を持つことのできる内容へと進化していく。

例えば、ロールオーバーという技術を用いて、当時の写真と現在の写真をその場で入れ替え、比較できる工夫をした。また、アニメーション機能を用いて坑道の掘削の様子をリアルに表現した。さらに、VRML(注1)の技術を駆使して、今では存在しない社員住宅や劇場を3次元立体映像で再現した。この再現には、当時の設計図をもとに尺度法を変換する必要があり、途方もない時間と多くの苦労を伴った。特筆すべきは、延べ100本を超える鉱山労働経験者のインタビュービデオのすべてに解説テロップを入れたことであり、このことは誰にでも理解できる見やすい作品づくりとして反映されている。作品は専門家によるアドバイスや最終チェックを経て追加・修正し、漸く完成した。

この作品づくりの中で最も大切にされたことは、「心が伝えられるページにする」ことであった。学習や取材活動の中で、多くの方々からいただいた「温かい心」に、生徒自身の感謝の気持ちを込めてのものでもあった。そして、年輩者や障害を持った方が作品を見ることも配慮して、文字や写真の大きさ、配色、アイコンの配置など、



写真3 地域の方を招いての学習会



写真4 東平地区を紹介した作品

誰もが利用しやすいページデザインにも心がけた。

2000年度作品のタイトルは、皆で悩み抜いた末に、「新世紀へのメッセージ 届け！あかがねの心」とした。この作品は、日本政府（総務省大臣官房新千年紀記念行事推進室）の主催するインターネット博覧会（略称：インパク）のパビリオンとして、高等学校としては全国で初めて登録されることとなった（写真4）。

この登録を機に海外からのアクセスが増加し、フランスやアメリカからも感想の電子メールが数多く届くこととなった。

(3) ホームページを飛び出して

学校発信のホームページ作成に止まらず、2000年7月に行われた「全国生涯学習まちづくりフォーラム—新居

さらに、インターネットを活用した生徒たちの取り組みが新居浜市の広報誌「市政だより」でミレニアム特集として取り上げられることとなった。その紙面も生徒たち自らが企画・編集・作成した。この市政だよりは、地域の方とのさらなるコミュニケーションづくりのきっかけともなり、愛媛県の行政広報誌のコンクールで特別賞を受賞する栄誉も獲得した（写真5）。

この年には、愛媛大学教育学部住居学研究室との共同研究も始まり、大学生と高校生の交流学习が南高校で見られることとなった。

このように、地域の人々の応援に加え、行政、企業さらには大学と連携した活動へ大きく広がっていった。そしてこれらの動きは2001年度にはさらに加速することになる。

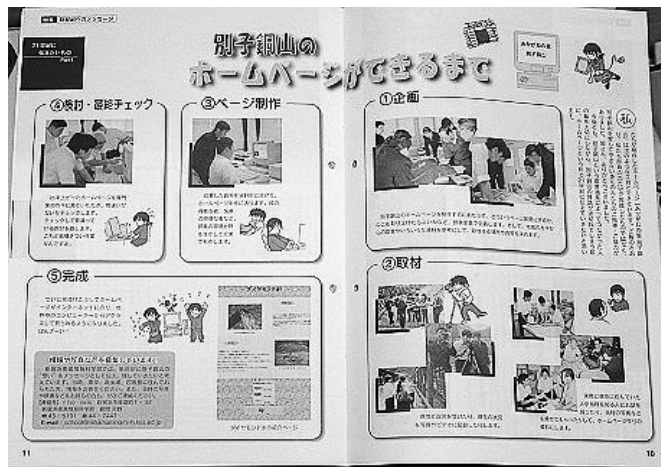
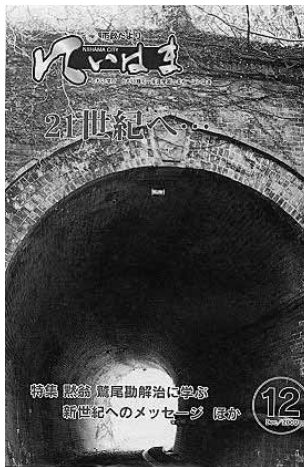


写真5 「市政だより」ミレニアム特集として紙面を編集

浜大会—」において、南校OBの協力も得て、作品を会場ロビーで展示し、多くの方に活動を知らしめる機会となった。

その直後の8月の「近代化産業遺産全国フォーラム—新居浜大会—」では、全国事例交流会の際、全国の自治体や関係者の中に混じって、唯一の高校生として事例発表を行う機会も得た。近代化産業遺産を生かしたまちづくりに高校生が参加し活躍している姿は全国的にも珍しく、熱のこもった発表に会場の参加者から拍手喝采を浴びた。

これを機に、全国的なつながりが芽生え、電子メールによる情報交換をはじめ、時には県外から来校し、アドバイスや資料提供がもたらされるなど、交流の輪が確実に広がっている。

4. 地域取材の確立

インパクへの登録を機に、2001年4月には新居浜市の別子銅山観光施設である「マイントピア別子・端出場ゾーン」に、作品の常設展示コーナーを設けることになった(表3)。インターネットの利用環境がない方でも活用できるとともに、作品を閲覧した方のIT講習受講のきっかけづくりにもなった。加えて、観光施設の訪問者が南高校の取組を知り、のちにインターネットからアクセスしてくる交流も始まった。

愛媛大学との共同研究の具体化は、高校生が主体となって近代化産業遺産を活用したまちづくりに関するガイドブック作成の共同作業として始まった。情報科学部員と大学生、顧問教諭らとのディスカッションを通して、

これまでの作成作業や調査を踏まえると、次には訪問者が実際に産業遺産関連の見学地に出向き、観察し、確認・作業の出来るスタイルのものの開発が欠かせないことに到達した。ガイドブックの名称は皆で知恵を絞りながらも、四国八十八か所に寄せて「別子銅山 近代化産業遺産八十八か所 ふれあいめぐりあいガイドブック」(注2)とした。このタイトルは、作業の方向性をともに理解し、イメージするのにぴったりのものであり、その後の困難な作成作業を乗り越えるのに大いに貢献した。

と言うのも、新居浜・別子での八十八か所巡りは、おおよその全体マップは作ってはいたものの、88のポイントの確定やその取材には予想を超えた時間と困難さが伴った。とりわけ、印刷物として完成させるには、緻密な取材とわかりやすい紹介記事が求められ、生徒らには大きな負担がのし掛かると同時に、みっちり鍛えられることにもなった。年度末にはガイドブックの一部が姿を見せるわけだが、その後、情報科学部では地道な取材とその方法の確立を培いながら、ガイドブックづくりは延々と情報科学部の後輩に引き継がれ、完成には数年を要することとなった。

一方、ホームページづくりは、別子銅山の環境問題をテーマにした「環境問題と戦った先人たちの知恵に学ぶ～日本初!公害克服の島 四阪島～」が「第8回 ぼくの街 わたしの村 マイタウンマップコンクール」において、過去最高の応募点数812点の中から「環境大臣賞」を受賞した(写真6)。

さらに、これまでの3年間の作品を集大成した「別子

銅山をインターネットで甦らせよう!」が、マルチメディアアート大賞実行委員会の主催する「第14回マルチメディアアート大賞」で「文部科学大臣奨励賞」(グランプリ)を受賞し、全国第1位の栄冠のおまけまで獲得した(注3)。

こうして、2001年度から始まったガイドブックづくりは、既往のホームページづくりにおける情報科学部員の得意技—情報通信作業やコンテンツ作成作業—に磨きをかけてとともに、学内外における学習機会や活動紹介に加えて、次なるステップである「協働学習」へと発展する転機ともなった。

5. 協働学習の試行—「生徒」が生涯学習の講師

ホームページ作成が一段落すると、その成果をもっと具体的に、かつ身近に訴える機会が増え始めた。それは情報媒体を通しての間接的なもの以外に、地域の人々との直接的学習交流の機会や出前展示会など、多彩な場面で与えられるようになった(表4)。

まずは媒体の多様化と広がりである。2002年度には、新居浜市および地元産業団体(新居浜ひうちライオンズクラブ)の支援の下に、これまでの生徒たちの活動をビデオ番組にまとめ、近代化産業遺産を学ぶきっかけづくりにしようとするプロジェクトが進行した。番組内容や構成、アナウンスなど、プロのアドバイスを得ながら、別子銅山学習ビデオとして36分の番組が完成した。年度初めの4月23日には、新居浜市役所で新居浜ひうちライオンズクラブによる贈呈式が行われ、市内の学校や公共施設にビデオ65本が寄贈された。ビデオは、地元ケーブルテレビ局により2か月近く放映され、大反響を呼び起こした。また、愛媛県企画情報部情報政策課を通して、総務省の推進する地域衛星通信ネットワークによる地域映像情報提供事業に推薦され、全国にも配信された。

秋には、科学技術振興事業団主催の地域科学博物館支援事業の企画「巡回展“銅製錬今昔物語”及び関連事業」(於;愛媛県総合科学博物館)へ参加・協力するチャンスを得た。その目的は、「日頃知る機会の少ない郷土の産業について、その起こりや発達過程、そして現在の優れた技術に触れることにより、地域の産業技術に対する青少年の興味を喚起するため。特に、郷土が誇った別子銅山の歴史を改めて振り返り、鉱業における製錬技術の

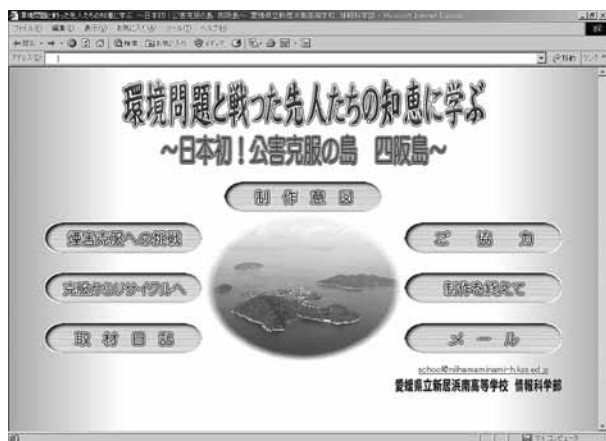


写真6 別子銅山の環境問題を紹介した作品

発達を学ぶことにより、科学技術の理解促進を図る」こととであり、9月末から12月中旬にかけて、市内の中・高等学校（新居浜市立西中学校、新居浜東高等学校、新居浜商業高等学校、及び南高校）の文化祭にあわせて巡回展を行った。

この年、情報科学部にとってもっとも大きな出来事は、生涯学習講座において、地域の方々に講義する機会を得たことである。これまで、生徒はいつの場合でも講座等の受講者に止まっていたが、10月の新居浜市生涯学習センター主催の新居浜生涯学習大学講座では、大人である地域の方を対象に情報科学部員たる高校生が講師を務めることとなった。それまでの新居浜・別子の近代化産業遺産に関わる膨大な学習ストックを、パソコンを駆使してわかりやすく提示し、講義していく試みは、シンポジウム等で鍛えられていたとは言え、彼らには新鮮で貴重な体験であった。何よりも、講義内容に対する受講者たる地域の方々の驚きと、高校生を見る優しい眼差しが大きな宝となった。この取り組みは、その後も後輩へ引き継がれ、多くの場面で「講師」となる高校生の成長が確認された(写真7)。



写真7 生涯学習大学講座での講義

6. 近代化産業遺産の理解の浸透

2003年度は「別子銅山」にとって大きな意味のある年となった。別子銅山の発祥地である別子山村が新居浜市と合併し、行政もその活用に向けて産業遺産活用室を設置し、本腰を入れることになった。既に文化財調査が終了していた住友別子鉱山の初代支配人・広瀬幸平の旧邸宅は重要文化財に指定され、市民レベルでは、別子銅山の産業遺産を世界遺産登録すべくシンポジウムが開催さ

れるなど、別子銅山関連の近代化産業遺産を取り巻く環境は大きな節目を迎えた(表5)。

こうした状況が活動の輪をさらに広げることとなった。8月上旬の新居浜商店街連盟主催「第23回 いはま夏まつり」では、商店街の空き店舗で展示を行い、延べ300名を超える入場者があり、大盛況となった。さらに、8月下旬には、新居浜市まちおこし委員会主催による「三翁展」へも参加し、展示の準備の段階からスタッフとして精力的に活動した。「三翁展」は、新居浜市のまちづくりに多大な貢献のあった郷土の偉大な先人、広瀬幸平、伊庭貞剛、鷲尾勘解治の功績を紹介する展示会である。開催期間中は、受付、案内に加え、車椅子など介助の必要な方へのお手伝い、機器の操作・管理なども任された。期間中、延べ3600名余が来場し、3、4回の再来場者もいたほどであった。なかには、本校のホームページで展示会を知り、遠路、新潟から来場した方もおり、大きな驚きと感動があった。

10日間という長丁場で、生徒は疲れの色が見えた場面もあったが、多くの人々との出会いも経験することができ、彼らに対する地域の期待を強く感じる事ができた。高校生という若い世代が果たした役割は非常に大きく、地域の人々に好感を持って迎えられるとともに、新入部員にとっては、これまで培ってきた先輩たちの努力やその成果の大きさも併せて実感することで、活動のあり方を再認識することができた。

秋の11月には新居浜市主催の新居浜市と別子山村合併の記念イベント、中旬には新居浜市立角野中学校文化祭において、「別子銅山には日本一世界一がいっぱい!!」と題してパネル展示や作品紹介を行った。また、年が明けての2004年1月には、NHK松山放送局制作の「伊予路てくてく」への出演機会も得られた。

この年度は、作品制作を飛び越え、地域での学習活動やイベントへの参加などを通して、活動を発表する場の多面化が図られた。他者からの評価を受けることで活動の意義を実感するとともに、新居浜・別子における近代化産業遺産の位置づけとその価値の理解、また、新居浜のまちづくりへの貴重な資産となるべく、その保存活用の意味もささやかながら理解の域に達しつつあり、次年度への活動意欲へとつながりをもたせることができた年となった。

7. 学習情報発信の多様化—別子銅山 e—ラーニングシステムの試行

2004年度は、情報科学部の活動が、地域の人々に認められ、地域振興への一助として期待され、具体的に動き始めた1年となった(表6)。

滞っていた産業遺産紹介のガイドブック制作も加速が付き始め、半分が完成し、8月には新居浜市生涯学習センター主催の新居浜生涯学習大学講座において、地域の方々を対象に「地域学 歴史のロマンを探る～別子銅山近代化産業遺産八十八か所ガイドブックの紹介(前編～)」が開催された。先年の生涯学習講座に引き続き、高校生が講師を務めることになり、予定の30名を遙かにオーバーする50名の参加者という大盛況の講座となった。その様子は、後日地元CATV(ハートネットワーク)で2時間番組として放映され、またまた大反響となった。部員が講座での講師を務めたことにより、先輩の活動を辿り、自身の活動の意味や今後の活動の方向を考える良い機会ともなった。

11月には、「国際ソロプチミスト新居浜みなみ」より、地域に根ざしたこれまでの活動を評価され、「青少年社会ボランティアクラブ賞」を受賞した。ホームページに関わる幾つかの受賞に比べ、何よりも地域からの評価が得られたことに感激するとともに、地域との連携の大切さを再認識するきっかけとなった。

暮れの12月には、新居浜まちおこし委員会主催による「フォーラム;まちづくりと新居浜魅力再発見～とっておきの新居浜物語。～」へスタッフとして参加するとともに、地域の高校生を代表してパネリストとして壇上に上がった。そのことで、これまでの取組に対して自信や誇りを感じることができ、まちづくりへの関心を深めることができた。

インターネットによる情報発信は、ホームページによる情報提供から一歩踏み出し、近代化産業遺産の学習宝庫として機能するよう、構築を試みた。それは、ガイドブックのPDF化により、情報が閲覧者に対して身近になったこと、プリントアウトして取り出せること、など様々な学習方法が可能になったことにある。そのために、これまで作成した膨大なホームページのストック、学習用ビデオ、ガイドブックを一元化し、「別子銅山 e—ラーニングシステム」の構築を図り、インターネット上で新居浜・別子の近代化産業遺産について学ぶことができ

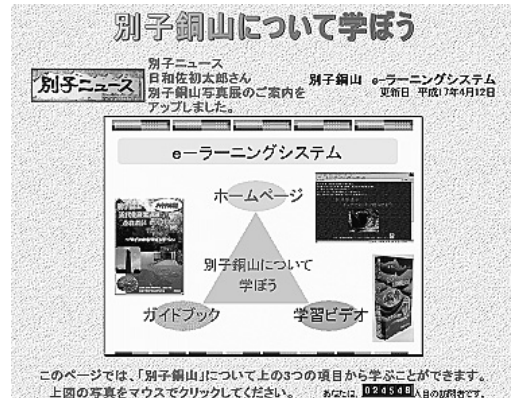


写真8 e—ラーニングシステムの画面

るようにした。子どもから大人まで、一般の人から専門家まで、あらゆる人々がそれぞれ工夫しながら学習できるユニークなものに仕上がりにつつある(写真8)。

8. 近代化産業遺産を生かしたまち学習の成熟—別子銅山八十八か所ふれあいめぐりあいガイドブック～マインからマインドへ—

産業遺産ガイドブックに取り組み始めてから既に4年の歳月が過ぎた。当初の意気込みとは別に、その作業は思いのほか難航し、後輩部員へ延々と引き継がれた。ただ、その内容の面白さ、ユニークさは自認するとともに、折々の学習講座等での紹介でも評価が高いことが作業を続ける原動力となった。そして2005年7月になって漸くのこと、産業遺産ガイドブックが大方出来上がった。この間、取材した関係者は延べ120名超、取材に訪れた場所も120カ所を超えるまでとなった。

その取材活動や完成時の様子は、地元テレビ局にて収録され、8月4日の特別番組「愛媛の戦後60年～別子銅山を記録する高校生たち～」として県内向けに放送された。また、NHK松山放送局制作の「西日本の旅」「愛媛の戦後特集」での活動の紹介に続き、愛媛、朝日、読売新聞でも取り上げられると、ガイドブックについての問い合わせが相次いだ。

8月5日には、昨年に引き続き新居浜生涯学習講座にて「地域学 歴史のロマンを探る～別子銅山近代化産業遺産八十八か所ガイドブックの紹介(後編～)」として、講座を開催した。今回も50名を超える参加となり、大盛況となった。その様子は、昨年同様、地元CATVでの2時間番組として放映された。同月6日には、新居浜

市主催の産業遺産シンポジウム「別子の山から四阪の島へ」で、「次世代の視点から」として、ガイドブックの取り組みを中心に発表する機会も得た。

秋の10月には、信州長野市で開催された「江戸のモノづくり」国際シンポジウムに参加した。参加者約1000人の国際的な会議で、国内外から研究者や関係団体、各地域でさまざまな取組をしている小・中・高校生が参加し、各地域でも自分たちと同じような取組を行っている姿を知るとともに、国内外の研究関係者とも親交を深めることができた。

明けて2月には、島根県大田市で開催されたシンポジウム『生産遺跡から探る「モノづくり」の歴史』にも参加した。地元の高中生と石見銀山遺跡の見学、そして研究発表会に加え、長野で知り合った高校生との再会などを通して同世代の交流の広がりを確認し得た。県内外での交流体験は、彼らの視野を広げ、活動の意味の確認ができる絶好の機会ともなった。

こうした様々な活動体験は、次なるステップとしてとても貴重なものとなった。それは、地元で初めて開催することとなる小学生とのワークショップの企画であり、計画段階から、「自分たちのガイドがさらに小学生自身がガイドをしたくなるような活動にしたい」という思いへ繋がるものとなった。

そして、いよいよ2006年3月25日、小学生とのワークショップが惣開公民館主催で持たれた。「別子銅山を高校生と探検しよう！in惣開」と銘打たれたワークショップは、惣開小学校の児童を対象に、学区内の産業遺産を学習するものであり、晴天の下、70名近い参加者で、児童と高校生の心温まる実楽しい催しとなった。このワークショップは、別子銅山の学習を通して培われてきたこれまでの活動を集大成するものとして、大きな一歩を記したといえる(写真9)。



写真9 小学生とのワークショップ

9. 活動の成果と生徒が獲得したもの

生徒たちの近代化産業遺産の学習は8年目に入ったが、今振り返るとこんなにも人の輪や活動の輪が広がるとは思わなかった。

(1) 情報の発信による大きな広がりを実感

インターネットを活用して情報を発信することで、学校を越え、地域を越え、国境を越えた。そして人と人の心の交流も生まれた。生徒たちは、この近代化産業遺産を郷土のすばらしい財産と捉え、インターネットを通じてもっと多くの方々に知ってもらいたいという強い思いとなり、どんな努力をも惜しまない意志や行動力を育てることとなった。

(2) 情報の交流により心の交流も誕生

電子メールなどを活用して多くの方々から双方向の交流もはじまった。時にはネットを離れて実際に出会い、親睦を深めることもできた。そして、地域の方の励ましの言葉や温かい支えは生徒たちにとって、何よりも大切な宝物となった。

(3) 地域の教材化による郷土を愛する心の芽生え

生徒たちはこの活動を通して、本当に郷土といえる新居浜に出会い、人に出会えた。そのことが郷土を愛し、人を大切に思う心を生むきっかけとなった。

(4) 高校生による地域・大学・行政をつなぐネットワークづくり

高校生が地域に出かけ、そこから行政のつながりが生まれ、さらに大学との連携が育った。高校生がそのネットワークづくりのきっかけを担い、インターネットの活用がその推進に果たした役割は大きい。

(5) インターネットによる生涯学習と未来に向けた学習環境の創造

インターネットを活用すれば、いつでもどこからでも自分たちの活動を振り返ったり、作業の進捗状況を確認できる。卒業生たちは、電子メールを活用して後輩にページ作成のアドバイス等を行い、時には、学習会や取材活動へも参加する。在学中の活動に止まらず、彼らの生涯学習へ向けたきっかけづくりともなっている。

10. まとめと課題

インターネットを活用したこの取り組みは、様々な可能性を秘めている。地域・大学・行政とのネットワークを生かし、今後は次のような実践・研究を行っていきたい。

(1) 「まち学習」から「まちづくり学習」への発展

2006年度は小・中学生とのワークショップをさらに充実・拡大していく予定である。次世代との交流をさらに深めていくことで、「まち学習」から「まちづくり学習」へ向けた学習として進化させたいと考える。

(2) 観光ボランティアガイドへの挑戦

観光ボランティアガイドのあり方についても模索してみたい。既に、県外はもとより、アメリカからも観光にきたいという問い合わせがあり、対応を迫られている。新居浜市では「新居浜コンシェルジュ」というホームページを立ち上げているが、高校生の視点に立ったガイドもできるのではないかと模索している。

また、ガイドブックの完成により、観光ボランティアの方々との連携を図り、高校生による現地での観光ボランティア活動も大切な課題である。

(3) インターネット技術を活用した「語り部アーカイブ」の構築

別子銅山が閉山し30年を経た現在、かつての別子銅山を知る人や、山で働き生活していた生き証人たちが高齢化を迎え、まもなくするとその生の話を聞くことが難しい状況となる。多くの方々に語り部として協力いただき、それをアーカイブ化して保存・蓄積することも緊急課題である。

(4) インターネットを活用した学校間連携の促進

すでに、長野や島根での交流のあった学校とインターネットを活用した連携を計画しているが、インターネット上に近代化産業遺産に関するバーチャル学習空間の構築し、同じような環境を持つ全国の教育機関との連携を図りたい。

インターネットを活用した教育実践により、「別子銅山の近代化産業遺産」＝「マイン（鉱山）」から出発した学習が、多くの人たちとの「心と心のネットワーク」＝「マインド（心）」を生むきっかけとなった。インターネットの活用は、さらにその「心」を育てるためにすばらしい可能性を持つと確信している。

近代化産業遺産を教育資源として掘り起こし、インターネットを活用することで、多くの人との絆が生まれ、「総合的な学習」の教育環境として大きな役割を担うとともに、希有な教育効果を生み出すことができる。

今後もさらに様々な分野の方々々と連携しながら、近代化産業遺産を生かしたまち学習を充実させ、「まちづく

り学習」へと発展させていきたいと考えている。そして、何よりも未来の地域リーダーの育成を目指したい。

最後に、本研究でお世話になりました別子銅山記念館元館長上垣起一氏をはじめとする多くの皆様方に心からお礼申し上げます(注4)。

— 注 —

- 1) 「Virtual Reality Modeling Language」の略であり、インターネット上で3次元の画像を構築するための言語を意味する。
- 2) 「編集・発行 新居浜南高等学校情報科学部、共同制作 愛媛大学教育学部住居学研究室」として2006年2月に発刊。1枚ずつ取り外して持ち歩けるようにファイルし、裏には感想やメモを記入できるようにした。
- 3) 「第14回マルチメディアアート」コンクールには全国の小・中・高校153校から458作品が出品された。
- 4) 上垣氏をはじめ、表1～7に登場するすべてのの方々へは記載の同意を得ているとともに、これまでのご協力に心からの謝意を表します。



参考文献

- 輝け！！300年の産業遺産 未来への鉱脈・別子銅山
 連産業遺産を掘る 近代化産業遺産全国フォーラム実行委員会（新居浜市役所商工観光課内）2000年
 歓喜の鉱山—別子銅山と新居浜— 新居浜市 1996年
 山村文化 第21号 山村研究会 2000年
 住友別子鉱山史 住友金属鉱山株式会社 1991年
 住友林業社史 住友林業株式会社 1999年
 日和佐初太郎 写真集 別子あこのころ 山 濱 島
 日和佐初太郎 1990年
 別子銅山 合田正良著 新居浜観光協会 1974年
 別子銅山と近代産業遺産—未来への鉱脈 新居浜市 1999年
 別子銅山と近代化産業遺産—写真と絵図でたどる新居浜の19～20世紀—新居浜市広瀬歴史記念館編 近代化産業遺産全国フォーラム実行委員会（新居浜市役所商工観光課内）2000年
 別子銅山中興の祖 伊庭貞剛物語 木本正次著 愛媛新聞社 2000年
 別子三〇〇年の歩み 明治以降を中心として 住友金属鉱山株式会社 1991年

表1 活動の草創期（1999年度）—ホームページ「あかがねの里 別子銅山」づくり

月日	場 所	活 動 内 容	観 察 ・ 備 考
H11 6月	別子銅山記念館・図書館	別子銅山関連の資料収集開始	 <p>学校紹介のホームページ活性化を目標とした地域紹介</p> <p>別子銅山の自然や産業遺産に興味・関心が高まる</p> <p>次の作品に向けての情報収集</p> <p>旧別子から次に採銅本部が移された、東平の産業・生活文化・教育をテーマとする</p> <p>報道メディアでの紹介 地域へ活動の周知</p> <p>地域の方との連携の第一歩始まる</p> <p>郷土・故郷への愛着や誇りの芽生え</p>
10.10	旧別子地区	初めての現地取材による情報収集	
11		ホームページ作品 「あかがねの里 別子銅山」完成	
11.6	端出場・第四通洞	現地取材による情報収集	
11.20	東平・東平歴史資料館	現地取材による情報収集	
H12		「あかがねの里 別子銅山」 第6回「ぼくの街わたしの村」マイウンマップコンクール 日本協会会長賞 受賞	
2月			
3.4	広瀬歴史記念館	現地取材による情報収集	
3.18	角野公民館学習室	地域の方と学習課会 松浦勲（東平出身）さん、谷屋峯凱（角野公民館館長）さん	
3.19	高齢者生きがい創造学園	講演会参加 講師：上垣起一（別子銅山記念館館長）さん 「別子銅山最後の挑戦～今もねむる別子の鉱脈～」	
3.24	新居浜南高校	松山明子さん（アマチュア写真家：日和佐太郎さんの娘）との交流会	
3.24	端出場・鹿森社宅跡	現地取材による情報収集	

表2 地域交流の萌芽期（2000年度）—ホームページ「新世紀へのメッセージ 届け！ あかがねの心」づくり

月日	場 所	活 動 内 容	観 察 ・ 備 考
H12 4.12	新居浜南高校	井上省二（別子銅山記念館前館長）さんとの学習会	地域の方を講師とし、学校での学習会始まる
4.13	新居浜市民文化センター	観光ボランティアガイド養成講座受講 ～別子銅山とフランス「ラロックと門之介の夢」～ 講師：新居浜市生涯学習課 長井秀旗さん	地域へ出かけた学習活動始まる 地域の方と肩を並べての学習が始まる
4.29	東平地区	松浦勲さん、谷屋峯凱さんとの現地取材	地域の方と現地に赴いての学習活動始まる
5.6	別子銅山記念館	上垣起一さんとの学習会	 <p>地域の方とともに現地取材</p>
5.18	新居浜市民文化センター	観光ボランティアガイド養成講座 ～『歓喜の鉱山』に見る別子銅山～ 講師：新居浜市教育委員会 高橋利光さん	
5.29	新居浜南高校	井上省二さんとの学習会	
6.3	別子銅山記念館	上垣起一さん、斎藤哲雄（別子銅山記念館副館長）さんとの学習会	
6.15	新居浜市民文化センター	観光ボランティアガイド養成講座受講 ～ファイナダーの中の赤石の自然～ 講師：愛媛県自然保護指導委員 工藤 順さん	
6.17	別子銅山記念館	上垣起一さんとの学習会	
6.19	新居浜南高校	井上省二さんとの学習会	
7.1	リーガロイヤルホテル 新居浜	全国生涯学習まちづくりフォーラムへの参加 会場ロビーにてホームページの展示・紹介	
7.13	新居浜市民文化センター	観光ボランティアガイド養成講座～坑内の体験ばなし～ 講師：ボランティアガイド部会長 近藤弘男さん	
7.21	近藤日出男さん宅	関係者宅への情報収集	
7.22	別子山村	施設見学・関係者からの情報収集	
		 <p>研究者からの情報収集</p>  <p>銅山体験者への聞き取り調査</p>	

高校生によるインターネットまちづくり発信

月日	場 所	活 動 内 容	観 察 ・ 備 考
7.24 ～25	新居浜南高校	井上省二さん、原 茂夫(東平出身)さん、石川登貴代(同)さんとの学習会 愛媛大学4回生 門屋春香さんとの交流	愛媛大学生との交流が始まる
8.5	端出場・マイントピア別子	井上省二さん、安藤寛和(ボランティアガイド)さんとの現地取材	
8.18 ～20	リーガロイヤルホテル 新居浜	近代化産業遺産全国フォーラム-新居浜大会-への参加 全国の活動事例として活動内容の発表	全国の関係者から高校生の取組が大きく評価を受ける
8.24	新居浜市民文化センター	観光ボランティアガイド養成講座 ～天然更新～ 講師:銅山峠ヒュッテ経営者 伊藤玉男さん	
8.26	新居浜南高校	井上省二さんとの学習会	これまでの活動の振り返りとこれからの展望について考えるきっかけとなる
9.9	新居浜南高校	近藤弘男さんとの学習会	
9.9	高齢者生きがい創造学園	生涯学習講座 別子銅山の群像受講 広瀬幸平と伊庭貞剛-四阪島への製錬所移転をめぐる葛藤- 講師:住友史料館主席研究員・新居浜市広瀬歴史記念館名誉館長 末岡照啓さん	フォーラムを契機として、行政の取り組みが活発化 多くの学習の場が提供され、近代化産業遺産への学習内容の深化が図られる
11.29	新居浜南高校	加重忠利(別子銅山記念館元館長)さん、井上省二さんとの学習会	多くの人とのつながりも生まれる
12月		「広報・新居浜市政だより」ミレニアム特集記事作成	行政との連携が始まる 市民に活動の周知さらに広まる
12.13	新居浜南高校	松山大学総合研究所地域研究センター研究員 藤本鐵雄さん来校懇親会	
12.31		インバク(インターネット博覧会)への参加(期間:1年間)	
1.15	新居浜南高校	ホームページ作品 「新世紀へのメッセージ 届け! あかゆい心の心」完成	
2.15	新居浜市民文化センター	観光ボランティアガイド養成講座受講 ～一島一家～ 講師:一島一家会会長 田中昌一さん	
2.24	愛媛県総合科学博物館	企画展示～別子銅山と産業遺産～の取材	
3.6	新居浜市内	情報収集(端出場・マイントピア別子、口屋跡公民館、共存・共栄橋など)	
3.23	新居浜南高校	福森豊(住友金属鉱山株式会社OB)さんとの学習会	



表3 地域取材の確立期(2001年度) —ホームページ「環境問題と戦った先人たちの知恵に学ぶ～日本初!公害克服の島 四阪島」づくり

月日	場 所	活 動 内 容	観 察 ・ 備 考
4.5	四阪島	現地取材による情報収集	企業との連携が始まるきっかけとなる
4.24	端出場・マイントピア別子	ホームページ紹介パソコンの常設展示	観光施設へパソコンを常設することで、インターネットが無い環境でも情報発信
5.22	新居浜市役所	別子銅山学習ビデオ制作プロジェクト打ち合わせ ボランティア団体(新居浜ひうちライオンズクラブ)、新居浜市	ボランティア団体からの支援を受け、銅山学習ビデオ制作に向けたプロジェクトが始動
6.2	端出場・マイントピア別子	現地取材による情報収集	
7.24	旧別子地区	現地取材による情報収集	
8.9	山根～惣閑地区	山根製錬所跡・住友化学工業株式会社歴史資料館にて情報収集	
8.10	別子山村	近藤鉄男(茂津山荘主人)さんとの学習会	
8.11	於登志～東平地区	現地取材による情報収集	
8.13	端出場～学校	下部鉄道跡を現地取材し、情報収集 愛媛大学4回生 菅野聖子さんと共同取材	
8.17	角石原～石ヶ山丈	上部鉄道跡を現地取材し、情報収集 愛媛大学4回生 菅野聖子さんと共同取材	
8.19	四阪島	観光ボランティアガイド養成学習講座受講 『四阪島踏査』 講師:住友金属鉱山別子事業所総務課 後藤美廣さん	大学生との共同取材
9.29	端出場・マイントピア別子	現地取材による情報収集 愛媛大学4回生 菅野聖子さんと共同取材	



月日	場 所	活 動 内 容	観 察 ・ 備 考
10.21	別子山村	伊庭貞剛翁没後75年感謝式典 (フォレストハウス)	
10.22	新居浜南高校	愛媛大学 菅野聖子さんとの学習会 (産業遺産の抽出)	産業遺産紹介ガイドブックの制作準備に入る
10.27	旧別子地区	現地取材による情報収集 南海放送ディレクター 伊東英朗さん 愛媛大学 菅野聖子さん同行	
11.15	四阪島～旧別子地区	ヘリコプターによる上空からの取材 (ホームページおよび学習ビデオ制作の取材)	大学生との交流学習
11.30	香川県高松市 香川県民ホール	第9回高等学校工業科生徒研究発表成果発表 全国コンクールにて優良賞を受賞	全国からの代表の他校生にも活動を披露 発表を経験する中で、活動の再認識
12.31	四阪島周辺	船上取材による情報収集	
H14 1.5	別子銅山記念館	大鉦祭取材 別子銅山親友会会長 藤田重雄さん	
1.14		ホームページ作品 「環境問題と戦った先人達の知恵に学ぶ～日本初!公害克服の島 四阪島～」完成	
1.16	松山工業高校	愛媛県高等学校工業教育生徒研究発表会での活動報告	
3.8	新居浜南高校	コロンビア大学文化人類学部博士課程 渡辺剛弘さんとの交流	海外との交流づくりのきっかけが始まる
3.9	東京・お台場 日本科学未来館	「日本初!公害克服の島 四阪島」 第8回「ぼくの街わたしの村」 マイタウンマップコンクール 環境大臣賞 受賞	
3.23		南海放送制作の別子銅山関連番組 (愛媛文化遺産映像調査事業:愛媛県) 「母なる銅山ふたたび」 ～生き続ける300年の歴史・ 別子銅山～にて活動紹介	後日、県外でも放映され、神奈川県に在住の 元銅山関係者などより問い合わせがある
3.26	新居浜市役所	新居浜市長へ受賞報告(後日、市政だより5月号にて紹介)	
3.29	新居浜南高校	「別子銅山をインターネットで甦らせよう!」 NECマルチメディアアート大賞 全国第1位 文部科学大臣奨励賞授賞式	3年間の取り組みが全国レベルで大きな評価 を受け、大きな自信を獲得
3.31	新居浜南高校	別子銅山 近代化産業遺産 八十八か所 ふれあいめぐりあい ガイドブック一部完成	産業遺産のすばらしさを多くの人に伝えたい
		 ガイドブックの表紙	卒業後も登校し、次の進路先へ行くぎりぎり までガイドブックづくりに専念
		 マイタウンマップコンクール表彰式	
		 NECマルチメディアアート大賞授賞式	

表4 協働学習の試行期(2002年度)―生徒が生涯学習講座の講師

月日	場 所	活 動 内 容	観 察 ・ 備 考
4.23	新居浜市役所	別子銅山学習ビデオ 「新世紀へのメッセージ」 届け! あかがねの心 贈呈式出席	 別子銅山 学習ビデオ
5.5	旧別子地区	現地取材による情報収集 コロンビア大学 渡辺剛弘さん共同取材	
6.15	別子山村	現地取材による情報収集 渡辺剛弘さん同行	
7.13	新居浜市民文化センター	市政60周年記念行事 「KOKAMI PROJECT」にてホームページ展示	

高校生によるインターネットまちづくり発信

月日	場 所	活 動 内 容	観 察 ・ 備 考
7.23	上部鉄道跡	現地取材による情報収集 コロンビア大学 渡辺剛弘さん 愛媛大学4回生 山本有希さん 共同取材、情報科学部OB参加	
8.22	伊予市、内子町	伊予市ワークショップ参加および内子見学 愛媛大学 曲田清維教授 4回生 山本有希さんとともに	他地域の様子を知ることで、自身の活動の振り返りができる
10.8		総務省：自治体衛星通信機構により 別子銅山学習ビデオ全国放映	
10.26	新居浜南高校 新居浜市民文化センター	新居浜市生涯学習大学講座 観光ボランティア養成講座 講師を務め、活動報告 情報科学部OB応援参加	地域の方より大きな声援があり、部員のモチベーション上がる
10.27	新居浜南高校	巡回展「銅製錬 今昔物語」 (主催：愛媛県総合科学博物館)	地元中・高校でも開催され、地域の他校生にも活動を広く周知する機会となる
～		10.27 一般公開 新居浜南高校文化祭 情報科学部記念碑除幕式	
11.1			
11.2	旧別子地区	「森になった街」 観光・交流イベントへの参加 俳人・夏井いつきさん カメラマン・渡部ひとみさん同行	
12.18	新居浜南高校	北海道新聞からの取材	
12.19	新居浜市民文化センター	観光ボランティアガイド養成講座受講 『四阪島』 講師：愛媛県総合科学博物館学芸員 吉村久美子さん	後日、その記事を見た北海道の炭鉱を中心に写真撮影している写真家、風間健介さんとの交流始まる
H15 3.29	広瀬歴史記念館	広瀬幸平銅像除幕式	今年度は作品制作としての活動の進展はほとんど見られなかったが、これまでの受賞効果により、活動報告の発表の機会が増加した
3.30	高齢者生きがい創造学園	広瀬幸平銅像復元講演会受講	これまでの荒しさからの開放で、活動を振り返る良机となった

表5 近代化産業遺産の理解浸透期（2003年度）—別子から世界へ

月日	場 所	活 動 内 容	観 察 ・ 備 考
4.13	広瀬歴史記念館	広瀬記念館銅像復元展示会	
4.13	新居浜市内 (株)表装工房泰峰堂	銀山・銅山交流展取材アーティストとの交流 彫刻家：ワイルズさん、 写真家：岡由紀子さん	他地域で活躍する鉱山に関わる関係者と交流を図ることで、視野が広がられる
4.29	別子山地区	現地取材による情報収集 愛媛大学4回生 村上恵梨さん共同取材	授業としての立ち上げについて模索を始める 『手がかり帳』の作成協力
8.1	上部鉄道跡	現地取材による情報収集	
8.3	別子銅山記念館	別子銅山関連の映画収録 「大鉆祭」の再現について現地取材による情報収集	
8.3	新居浜市 昭和通り商店街	にいいま夏祭りイベントへ参加 ホームページ・学習ビデオ展示	地域活性化への取組みとして評価され、期待の芽が生まれる 活動を発表する場面の多様化
8.5	端出場・マインピア別子	観光坑道を現地取材により情報収集 愛媛大学4回生 村上恵梨さん同行取材	
8.20 ～30	新居浜市郷土美術館	別子銅山関連イベント『三翁展』へ作品展示と共にスタッフとして参加 主催：新居浜まちおこし委員会 河合隼雄文化局長の来場	スタッフとして準備から運営に関わり、地域の方の取り組みの背景を見ることで、取り組みの姿勢に真剣さが増すこととなる


月日	場 所	活 動 内 容	観 察 ・ 備 考
10.1	銅夢新居浜	「英国・新居浜」産業遺産フォーラム受講	別子銅山の近代化産業遺産の世界文化遺産登録を意識した展開に取組む気運が高まる
11.1	山根体育館	新居浜市合併記念イベントにて作品展示	
11.16	新居浜市立角野中学校	中学校文化祭へ参加 作品展示	
11.29	四阪島	現地取材により情報収集	
H16 1.30	新居浜ウィメンズプラザ	NHK 松山放送局制作 「伊予路てくてく」出演	
			

表6 学習情報発信の多様化期（2004年度）—別子銅山e-ラーニングシステムの構築

月日	場 所	活 動 内 容	観 察 ・ 備 考
4.1	東平地区	現地取材により情報収集 石川登貴代さん同行取材	発表を通して、先輩の活動をたどり自身の活動の意味やあり方、今後の活動の方向を考える機会となる
5.29	学校～端出場	下部鉄道跡を現地取材により情報収集	
7.28	別子山地区（筏津山荘）	現地取材により情報収集 キレングショウマ撮影	
8.6	新居浜市 生涯学習センター	新居浜生涯学習大学講座 「地域学 歴史のロマンを探る」 『近代化産業遺産を生かした八十八か所ガイドブックの紹介』講師 ※番組収録され、後日地元CATVにて放映	
11.14	端出場・鹿森社宅跡	現地取材による情報収集 山川静雄(鹿森社宅出身)さん、 谷屋峯凱さん、松浦勲さん同行	
11.19	リーガロイヤルホテル 新居浜	青少年社会ボランティアクラブ賞受賞 主催：国際ソロボチミスト新居浜みなみ	
12.11	新居浜市文化センター	フォーラム「新居浜魅力再発見」参加 主催：新居浜町おこし委員会	高校生代表のパネラーとして出演
H17 1.11	新居浜南高校	『e-ラーニングシステム』の構築開始	インターネット上で別子銅山を学習できるように、学習ビデオ、ホームページ、ガイドブックとともにセットにして再編成
2.19	新居浜市民文化センター	シンポジウム江戸「モノづくり」遺産の再発見—別子銅山と石見銀山—受講 奈良文化財研究所主任研究官 村上 隆さん 国立科学博物館 主任研究官 鈴木一義さん 武庫川女子大学 教授 三宅宏司さんとの交流	高校生たちの取組みが、地域・行政をつなぎ、地域を活性化し、次世代のまちづくりへの掛け橋として重要であると有識者より注目される

表7 近代化産業遺産を生かしたまち学習の成熟期—別子銅山近代化産業遺産八十八か所ふれあいめぐりあいガイドブック～メインからマインドへ～

月日	場 所	活 動 内 容	観 察 ・ 備 考
4.5	端出場～石ヶ山丈	現地取材による情報収集 石ヶ山丈貯水場跡 現地案内として、東平出身者の石川登貴代さん、福田晃さん同行	ガイドブックの早期完成と、それを発展・多様化した作品づくりの開始
8.4	南海放送	「愛媛の戦後60年 別子銅山を記録する高校生たち」として特別番組7分放映	特に、人との交流を重点とした活動の展開を目標とする
8.5	新居浜市生涯学習センター	新居浜市市民大学講座「別子銅山 近代化産業遺産 八十八か所（後編）」	
8.6	新居浜市文化センター	産業遺産シンポジウム「別子の山から四阪の島まで」 研究発表	
9.24	NHK松山放送局	「西日本の旅 よみがえった銅山の森」の中で取組紹介。西日本地区放映	
10.21 ～ 10.23	長野県長野市 ホテル国際21 長野	「江戸のモノづくり」国際シンポジウム in 長野 研究発表 佐渡・石見・別子の金・銀・銅で次世代交流の輪が広がる 国外の有識者との交流	国内外の関係者の取り組みを知ることで、交流の輪の広がりとともに、大きく視野を広げられる
11.2	NHK松山放送局	「いよかんワイド 戦後60年 別子銅山」の中で取組紹介	
11.10	愛媛県県民文化会館	総合学科全国大会 研究発表	
12.13	愛媛県総合教育センター	第1回 高校生自慢の 手づくりホームページコンテスト 学習成果発表部門 最優秀賞受賞	様々なメディアでの報道、コンクール受賞で取り組みの深化がみられる
H18 2.10 ～ 2.12	島根県大田市 石見銀山遺跡跡	シンポジウム『生産遺跡から探る「モノづくり」の歴史』 地元高校生と石見銀山遺跡の見学や発表会を通して交流の輪が広がる	県外での活動を通して、自身の活動を評価し、地元での活動のあり方を模索
3.25	新居浜市惣開地区	「高校生と別子銅山を探検しよう！in 惣開」 惣開公民館主催 惣開小学校校区の小学生と保護者70名余り参加	次世代を巻き込んだ大きな活動の一步を踏み出す